

《題目》お中元もお歳暮も禁止

大学を卒業し、オイルショック直後の就職の超氷河期昭和 52 年ですが、ブリストル・マ
イヤーズに入社し、研修を終え、バイオケミカル事業部の自動分析室に配属された。理学
部化学科で物理化学を専攻した私にとって、臨床検査は全くの異分野でした。

6 月頃となり、同期の中で、上司へのお中元をどうするかが話題になりました。母から、
会社に入ったら、上司へのお中元お歳暮は、絶対に忘れると言われていたこともあり、「と
にかく先輩に聞いてみよう」ということになりました。

そこで、同じ自動分析室の M 先輩に聞いたところ、「この会社では、お中元もお歳暮も必
要無いよ」と教えてくれました。にわかには信じることができず、他の複数の先輩にも聞
いてみたところ、答えは同じで、社内規則に明記されていると言う先輩もいました。

そこで疑問になったのは、「何故、この会社は、お中元やお歳暮を禁止しているのであろ
う？」ということ。これに対する答えとして、『1.米国本社では、そのような習慣がない』
こと。『2.お中元やお歳暮の金額や好みの良否で、部下の評価が変わることがある』こと。
『3.会社組織の階層は、業務を処理する上の役割分担に過ぎない』こと。従って『上司の機
嫌取りのような習慣は、するべきでない』というのが、当時のブリストルの日本支社の考
え方であったようです。

私は、ブリストルでもバイオ・ラッドでも、上司や会社の上層部へ、お中元やお歳暮を
贈ったことはありませんでしたが、若干名の社員は、密かに高価なお中元やお歳暮を贈っ
ていたようであり、彼らの一部は、昇進が早かったのも事実です。“ヒラメ社員”なのに。
そのことを聞いても、私は態度を変える気にはなりません。欧米の企業でも、この
ような事が、実はあるのです。自宅などでパーティーを開き、そこに、上司と奥さんを招
待するのです。自分の奥さんや子供まで巻き込んで、出世の為の努力をするのだそうです。
昇進したら、更に上を目指す。このような方法で昇進するには限界があり、多くの場合、
この方法で昇進した人は、一定以上昇進できなくなり、他社に転職していくことが多いそ
うです。